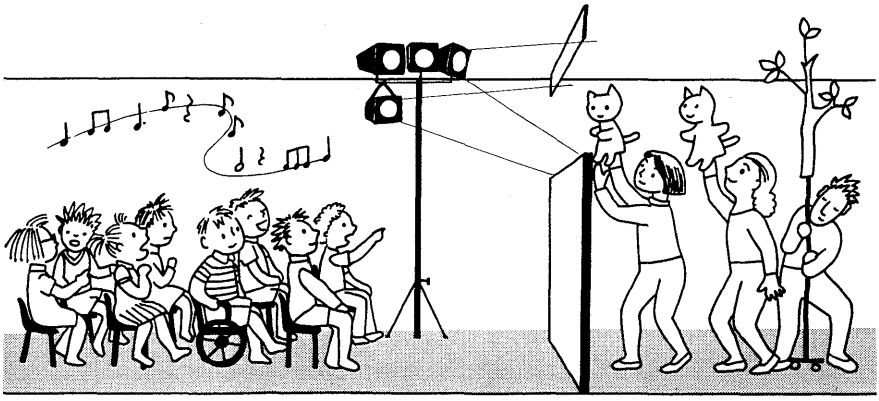
ここから先は子ども席

――ちかごろ思うこと(1)――

永野　むつみ



カット　山根　裕子（ひぽぽたあむ）

人形劇を観なくても子どもは育つ

「お待たせしました。開場です」

ドアを開けると、三十分以上も前から並んで待っていた観客がなだれ込んで来る。公立図書館の視聴覚室。利用者拡大を目的とした図書館主催の人形劇公演だ。主な観客は、幼児とその保護者。低学年の児童はいるが高学年はいない。図書館の利用自体が少ないそうだ。

保護者に手を引かれた子どもの足は、宙に浮いている。引きずられていると言った方がいいくらいだ。

「前よ、前よ、前へ行きなさい」

保護者たちの声が会場内に響く。

私たち人形劇団「ひぼぼたあむ」では、最大観客数を百五十名としている。すべての席が〝一番良い席〟になるように。そして、子ども席とおとな席を分け、子ども席用として手作りベンチを持参している。

「ベンチ席は子ども席です。おとなは後ろの方へお願いします」

声をかけ続けないと、親子が並んで座ってしまう。前列におとながそびえ立つように座っている。〝ここから前は子ども席です〟の看板がむなしい。

しかし、いったん腰を降ろした方に移動をお願いするのは、勇気がいる。はずむ気分を壊してはいけない。ネガティブな物言いは避け、できるだけポジティブにする。しかも全体には叫ばない。一人ひとりに個人的にお願いする。劇場でのルールを知らないことは恥ではない。劇場体験が絶対的に少ないのだ。これは子どももおとなも同じだ。そのつどマナーを伝えるのは、主催者と劇団の仕事の一部だ。根っこにあるのは、みんなで楽しもうよ、ということ。おとなが〝私の子ども〟から〝私たちの子どもたち〟と視野を広げることで解決できることも多い。

「うちの子は、まだ一人では観られませんから」

あくまで親子で並ぶことに固執する方もいる。一人で座って観られるようになってからが〝観客年齢〟だと考えているが、劇団主催公演以外で年齢を限定するのはむずかしい。しばしば0歳からの「観客」を覚悟しなければならない。

「ではご一緒に、あちらの席ではいかがですか」

子ども席とおとな席の境めの列を勧める。〝だっこ席〟と私たちは呼んでいる。

「あら、ちょっと後ろね」

「でも、見えないことはありません。舞台が高いので、却って小さい方には見易いくらいです。あまり前だと上を見上げる格好で疲れますもの」

「あっちの方が良い席だって。Aちゃん行こう！」

再び子どもの手を引っぱって移動する。この間、子どもは無言。子どもの意思はないのか。保護者の迫力に圧倒されているのか。

「じゃあ、アンタはここにいなさい。お母さんは後ろに行くからね」

「そうね。今日は一人で座れるんじゃない？　他のお友達も一緒だし」

子どもの年齢や、様子を見ながら私たちも声をかける。半分は子どもに、半分は保護者に対して。昨日までは離れられなくても、今日からは大丈夫ということもあるのだから。

これですんなりと離れられる親子もいるが、ダメな場合もある。親の方が手離せないのだ。

「大丈夫？　お母さんは後ろにいるからね。がんばってね。本当に大丈夫？」

あまりにていねいな別れ方をするせいか、子どもは却っていぶかしがり、不安気な表情になる。無理に離れても、保護者の後ろをベソをかきながら追ったりする。

「どうして席を立って来たの！　前に座っていなさいって言ったでしょ！」

叱責の声。ピシャリとたたく保護者さえいる。みると確かにその子どもの席には、すでに他の子が

座っている。もう元には戻れない。どうしよう。もはや泣くしかない。楽しいはずの人形劇場が涙、涙で始まってしまう。ついたての後ろでスタンバイしている私たちの耳に、しゃくりあげる声がつきささる。

こんなときだ、〝人形劇なんか観なくても子どもは育ちますよ〟と呼びかけたくなるのは。

親心1

そして終演後、追い打ちをかけるようにこんな光景も目にする。やつぎ早に子どもに質問する保護者たち。

「どうだった？　おもしろかった？」「どこが？」「ただおもしろかっただけじゃわからないのよ。どこがってちゃんと言えなくちゃ」「どんなお話だったの？　言ってごらんなさい」……。

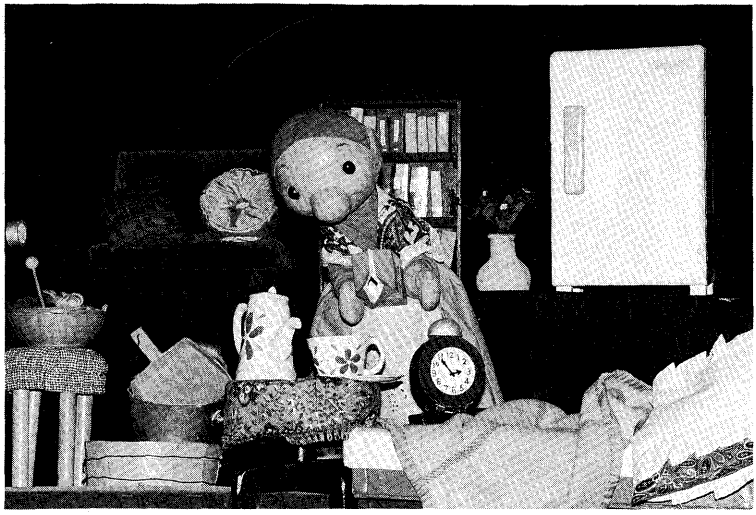
しだいに詰問調になっていく。傍目八目（おかめはちもく）。聞いているのが辛くなるやりとりだ。観劇後、すぐにまとまった感想など言えるものかどうか、自分自身のことをふり返ればわかることだ。粗筋が言えることと、劇がわかるということ、感想がすぐに言えることと、劇を楽しむということは、関連はしているが別の次元のことだ。

こんなことを繰り返していたら、劇嫌いの子どもが育ってしまわないかと、またまた心配になる。

観劇に即効性を求める見方は貧しい。カンフル剤ではないのだ。どちらかと言えばおやつ。主食ではないが、三度の食事を補完する大切な栄養源。何よりも、生活の愉しみ、あそびなのだ。子どもが自分から話し出すのを待ってほしい。

「子どもと一緒に来ていることを忘れてしまって、自分が夢中になってしまいました」

こんな感想を聞くとほっとする。子ども席とおとな席を分けたかいがあるというものだ。おとなにも一観客として人形劇を楽しんで欲しい。人形劇は観客の目にするものが、人間ではなく人形だという特



▲　ばばばあちゃんのいそがしい夜

徴をもつ、演劇の一ジャンルだ。人形は、そのままでは命をもたないただの物体にすぎない。しかし、演技者の技と、観客のイメージによって、まるで生き物のように見えてくる世界だ。従って、五歳児は五年分の体験を総動員し、五十年生きたおとなは、五十年分の人生の重みをかけて人形劇を楽しめるはずだ。観客年齢に下限はあるが上限はない。

「あ、お父さんが笑ってる」

「へぇ、お母さんも泣くんだ」

親が「親」であると同時に、（先生が「先生」であると同時に）自分と同じ人間だったのだという発見は、子どもを元気にする。

親心2　おおきなお世話

人形劇を観ながら子どもたちは、いろんなことを口にする。騒々しいというのとは違う。心が揺れて、思わずポロリと言葉が落ちるというところか。

私たちの人形劇は、片手遣いの人形で、衝立の中

で始まり、衝立の中で終わるという、どちらかと言えば素っ気ないものだ。観客に直接話しかけるだし物は少ない。観客参加型の劇に慣れた子どもの中には、とまどいもあるようだ。しかし、人形の動きをメインにしてドラマが進行するので、注意深く観ていないと、見のがしてしまうことに観客は気がつく。しだいに前のめりの構えになっていく。こうなるとしめたもの。人形つまり演技者の〝息づかい〟まで届いている手ごたえがある。観客のため息も聞こえる。つながっている！

子どもたちのつぶやきが聞こえる。

「あれ、誰」「どうしたの」「なんで」等々。

観てたらわかるよ。ふんふんふん——。演技者はワクワクする。人形劇は小説ではない。どちらかと言えば詩。観客の想像力をアテにして成り立っている。どんな見方だってありうるのだ。

そんなとき、保護者が傍にいるとやっかいなことになる場合がある。

「どうしたんだろう、この子は。観ていてわかんないのかしら」

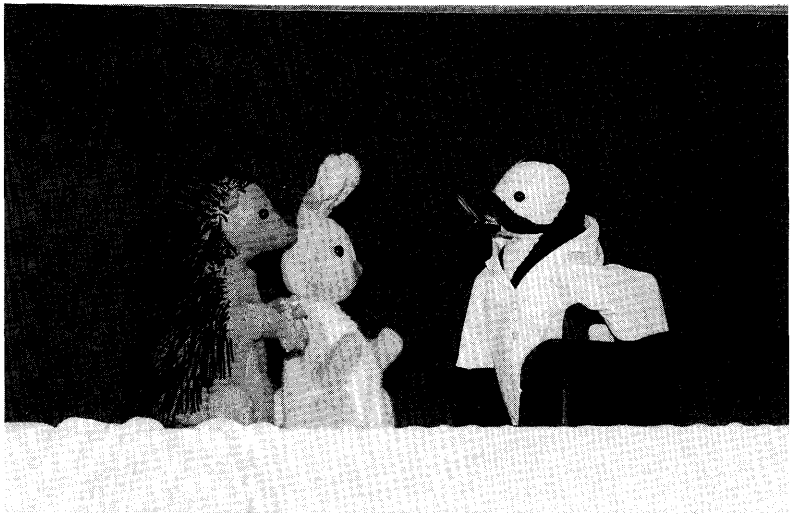
心配になるらしい。そして、困ったことにあわてて応えたりする。

「あれはネコよ」「皿が割れたの。アンタも観てたでしょ」等々。

しだいにエスカレートして、問われる前から説明してしまう。しかし、ていねいに聞いていれば、子どもたちの「誰」「どうして」は他人への質問ではないことがわかる。自問自答。おとなら自分の内側でやっていること。強いて言えば感嘆符。よしんば質問だとしてもそこでは応えないで欲しい。

「誰かしらね」「どうしたんだろうね」

そのまま返して欲しい。これは不親切ではない。たかが人形劇。わからないこともあって良い。その場ではわからなくてもずっと後で、ああ、あれはそういうことだったのかと腑に落ちる。私たちもよくあることだ。幼い観客ならなおのこと、自分で感じ



▲　「ハリネズミと雪の花」

て考えて、そして、発見する、この楽しみを奪ってはいけない。このように、今のところ残念ながら、親子席の分離は〝好き勝手に観る自由の保障〟という意味あいもある。

ちなみに幼稚園、保育園の場合は、四歳以上が前方、三歳以下は後方に座ってもらう。「ドラマ」を理解し、楽しめる年齢の子どもたちに一番良い席で観てもらいたいからだ。三歳以下の子どもたちは、人形の一つひとつの動きにそのつど反応し、手をふったり、声をかけたり、セリフをリフレインしたり、立ち上がったりしたい。結果として「ドラマ」を楽しむ子どもたちにとって壁的な存在になる。後方に陣どれば、静止する野暮も避けられ、双方が観たい見方で、のびのびと楽しむことができる。年長児の、適格で豊かな反応が、舞台と客席との結びつきを強め、ドラマの進行を支え、観客集団を大きくリードしてくれる。子どもの「劇を楽しむ力」はおとなに優るとも劣らない。

主催者の責任

観客席をどう作るか、とりわけ、最大観客数＝定員をいくつにするかは大切な条件整備だ。観客年齢が下がれば下がるほど注意が払われなければならないと思うが、演目や対象年齢、上演時間ほどには話題にならないのはなぜだろうか。

演技者と観客はもちろん、観客同士の生きた交流もみんなで観る人形劇の楽しさの大切な要素だ。ふともらしたため息や笑い声が伝播する。誰かのヤジに誰かが応える。茶々やひやかしへの無反応を含めて、自分のつぶやきが「受けとめられた」実感がもてる集団の規模。〝観客〟としての自分の重さに気がつける集団の規模で、私たちの人形劇は観て欲しい。観客なしには演劇は成立しないのだから。

しかし、この定員の厳守は思いの他困難だ。チケット売りの場合は、収益との兼ね合いから、一席あたりの単価を下げるために観客数を増やしてしまうことがある。より多くの方々に手軽な料金で観せたいという主催者側の〝善意〟は、しばしば劇団側にとっては脅威となる。「届いているかしら」という不安の中で演じるよりも、多すぎる観客を分けて、ステージ数を増やした方が、演技者としては疲れない。

図書館や社会教育施設等の主催上演（買い上げであり、観客は無料）の場合も同様だ。税金を使っての取り組みだからということで、来る人拒まず。開演まで観客数を把握できないことが多い。会場の狭さを理由に、事前に整理券を配布したり、申し込み制をとるなど混乱を避ける努力をしているところも増えてはいる。しかし、当日の集客数で、企画そのものの成功・不成功を判断する体質もまだまだ残っていてやりきれない。

定員のワクを無理に広げて、粗筋はわかったが何も感じるところがなかったという観客を増やしてもしょうがない。それで生の人形劇なんてこんなものだと判断されるとしたら悔しい。二度と劇場には足

を運ばなくなるかも知れない。それよりも定員は定員として厳守し、みんなが〝一番良い席〟で堪能する。観のがした人は次の出合いに期待をかける――こうした取り組みの方が長い目で観るといい観客を育て、いい劇を育てることになるのだと、担当者はぜひ気がついてほしい。

劇場をあそぼう

劇場で観る演劇とテレビの決定的な違いは、わざわざかけて行くというところにある。この「わざわざ」を、もっと楽しむためにも予約制、チケットの存在を見直したい。誰と行こうか、何を着ようか、観劇後どこでお茶を飲もうか……。チケットを手に入れたときから楽しみは始まっている。

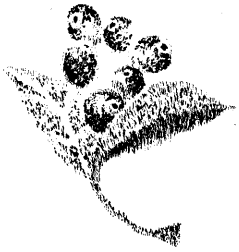
幼稚園、保育園でもチケットを作り、〝劇場ごっこ〟として観劇会を展開したらどうだろう。そして、選んだ人もはっきりさせる。

「今日の人形劇はA先生が選びました」

「へぇ、A先生はこういう人形劇が好きなんだ」

人形劇を観ることが、A先生をもっと深く知る機会にもなる。観劇は人と人をつなぐ。

幼い観客がひとりひとりチケットを手に入場し、おもいおもいに席を占める様子を想像すると愉快だ。

一つの席に一人の人格。劇場は年齢に関わらず一観客をして尊重される場でありたい。

（人形劇団　ひぽぽたあむ）